

Title	ラッセルの思想とウキリアム・ジェームス(二)
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.9 (1920. 9) ,p.1307(123)- 1315(131)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19200901-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

のである。けれども國家は將來死滅するとする議論は論争の餘地があることと思はれる。マルクス派の國家觀は國家の機能を經濟的のものに見たのであるが、國家の機能を經濟的でないとする人にとつては經濟的掠奪、被掠奪階級の廢止が必ずしも國家の廢止とはならないのである。國家は經濟的機能以外の機能を有する。ギルド・マンはかゝる見地からマルクス派の「國家の死滅」に對して賛成しないのである。このギルド・マンの批評の如き有力な批評があるにも拘らずマルクス派の國家觀はすべての進歩的思想における國家觀の出發點として現代社會思想の中に動かすべからざる勢力を有するものである。

(註一) Engels: -op. cit. pp. 211-212.

(註二) Engels: -Socialism, utopian and scientific Kerr ed. pp. 126-129. 河上博士、社會問題研究、通冊五九八-六〇〇頁の譯文を借用す。

あつたと考へるのである。(一九二〇・七・二〇稿了)

ラッセルの思想とウヰリ

アム・ジエームス (二)

奥井復太郎

四

個性の研究は必然心理學倫理學社會學哲學上の重大問題にして殆ど凡ての先哲古賢に依て試みられたる「自我」の神祕に觸れざる可らず。ウヰリアム・ジエームスは其の大著(Principles of Psychology (1891))に於て「自我」に就て長く述ぶる所あり。(vol. I Chap. X pp. 291-401)

ウヰリアム・ジエームスに依れば心理學の第一歩に於て先づ假定し得るの事實は思惟の事實其ものにして(P. 224)此等の意識作用(Consciousness) (vol. I. cf. p. 224 and p. 186)は應て個人的傾

(註三) Marx & Engels: -Communist Manifesto p. 41.
(註四) Marx & Engels: -op. cit. p. 42.
(註五) Jan. St. Lewinski: -Origin of Property.
(註六) 高田保馬氏著社會學原理八九五頁以下
附言。マルクス派の國家觀においては本文中にも言つた様に Engels の所謂國家の死滅の點に關する部分が最も特色あり興味ある問題である。然るに同問題は無産者の社會革命の方法と結び付いており、且つその問題を論ずる行掛り上 Proletarian Dictatorship 乃至は暴力革命について述べなければならぬので止むを得ずこゝには一切このことについて論じないことにした。讀者にして、もしこの點に關するマルクス説と、其のマルクス説の種々な解釋とを知らんとする人は V. I. Ulianov: -The State and Revolution. Marxist Teaching on the State and the Task of the Proletariat in the Revolution. を一讀せられんことを希望する。右の Ulianov の書はマルクス派の極左黨なれば之に Kautsky, Bernstein の書を以つてすればこの問題に關するマルクス派の意見は大體において盡きてゐると言つていいのである。始め本論文起稿に際してマルクス派の國家觀中最も興味ある、且つ實現に時事問題となつてゐる Proletarian Dictatorship に關する議論も論述する筈であつたので「マルクス派の國家觀」と題したのであるが本論の構成上今は「Friedrich Engels の國家觀」とした方が妥當で

向を帶ぶるものなり。個人の「一つの思想は彼の他の思想との間に交渉すと雖も其は常に彼の思想にして決して他の主體の思想たることなし。曰く『此等の心の各は自己の思想を各自に保有す其の間に何等與ふるもの無く又交易するものなし、如何なる思想も自己を離れて以外他の個人的意識中の一個の思想を直接に認むること能はず。絶對的隔離不分的多元性は其の法則なり。故に根本的的事實は單なる思想又は「此の思想」或は「其の思想」に非ずして「己の思想」凡ての「所有せられたる」思想たるの觀あり。時間に於ける一致、空間に於ける接近、性質又は内容に於ける類似等は何れも異なる個人的精神に屬するの蔽遮に依て分離せられたる思想を融合し得るものに非ず。斯かる思想の間に於ける間隙は質に於ける最も絶對的の間隙なり。然も個人的精神(Personal Mind)を稱せらるゝに相當する

「或物」の存在が主張せらるゝ限に於ては何人も其の性質に關する特殊の見解の如何を問はず其の事實の眞なるを認む可し。斯かる意味に於て個別的自我は思想よりも心理學に於ける直接の論據として取扱はれ一般的に意識せる事實は「感情及び思想存す」の事實に非ずして「我考ふ」及び「我感ず」の事實なり。如何にしても心理學は個々の自我の存在其のものを疑ふを得ず。一つの心理學の爲し能ふ所の最悪は此等の自我の性質を異解して其の價值を奪はんとするに在り。』(vol. I p. 226)

『心理學者が研究する心なるものは一現實の空間並に一現實の時間の一定の一部に存在する一定の個人の心なり、他の如何なる種類の精神即ち absolute Intelligence 特定の肉體に附隨せざる Mind 又は時の進行に隨從せざる Mind 等は心理學者の何等交渉を有せざるものなり。彼が唱

存し以て時間に對する彼等の集合的關係に就ては他に言ひ得ることなし。』(p. 199)更に彼が精神的職能に就て述べたる所は再び吾人をして自我の存在に到達せしむ可し。曰く

『腦髓以外の事物に對する心的關係は吾人の知る範圍内に於ては全く認識及感情の交渉なり其は此等の事物を知り而して又内的に彼等を歓迎し或は排斥し其の以外に何等他の交渉を有せず』(p. 216)

而して斯かゝる撰擇の依て行はるゝ基準はシエームスの所謂 Interest にかくて此の Interest の主體の存在は到底疑ふ可らざるものなり彼は斯くて

『吾人が事物の思考に當て常に多少共に意識せるは我自身即ち吾人の「個人的存在」なり、而して意識する主體は同時に「自我」其のものなり故に「自我」の全量は其の一部は知覺せられ一部

ふる Mind とは個々の精神に對する集合的名辭に外ならず彼の著實なる研究にして斯かる絶對的 Intelligence の探究に腐心する哲學者の利用し得べき何等かの統合に結果することあらば將に幸なる可し。』(vol. I p. 183)

吾人が知るがまゝの精神とは一時的存在なり吾人の精神が其の肉體の發生に先づ存在を有するや否や或は其が其の肉體死滅後に於ける存在を有す可きや否やは所謂科學的事實(同書序文參照)に依らずして寧ろ吾人の一般哲學又は神學に依て解決せらる可き問題なり。吾人は所謂心靈論の事實は猶ほ論議あるものとして殘すなり。自然科學としての心理學は現在の生命にのみ限定せられ此等の生命に於ては總ての精神は何れも其の依て表現すべき肉體に羈絆せらる。然らば現在の世界に於ける精神は時間の同一の器中にあつて互に或は先行し或は隨從し或は並

は知覺し又一部は客體にして一部は主體たるが如き二重性を有するが故に當然二つの部分に差別せざれざる可らず。吾人は稱して一を「客體我」(ME)とし他を「主體我」(I)とす。(cf. Text Book of Psychology 1892. p. 176)又は稱して「知覺せらるゝ自我」又は「經驗我」(the self as known, or the 'empirical ego')及「知覺するの自我」即ち「純我」the self as knower, or the pure ego) (cf. the same)而して「經驗我」は客觀的自我及其の所有格の名辭に依て表現せらるゝ事物を言ひ更にシエームスは之を三分して 一、自我の構成素 二、其の感情及情緒即ち Self-feeling 三、其の行爲即ち Self-seeking Self-preservation に分てり。又此等に就て各、物的自我社會的自我精神的自我の區別を設けたり。簡單に以上の自我の内容を示せば次の如し。即ち

(一)自己求得又は自己保存

- (a) 物的自我 即ち身慾・本能・裝飾慾・獲得性・建設性・家庭に就ての愛着
- (b) 社會的自我 即ち喜悅・注目・賞讃を欲するの願望・社交性・競争心・猜疑・愛・名譽心・功名心
- (c) 精神的自我 即ち知的道德的宗教的靈感良心的信仰

(二) 自己評價

- (a) 物體自我 即ち個人的虛榮及謙遜、富の矜及貧困の恐怖
- (b) 社會的自我 即ち社會的家族的矜持、虛飾・驕慢・謙遜及び恥辱
- (c) 精神的自我 即ち道德的宗教的優超及び清淨の感、低劣罪業の感

而して純我の問題に至つては心靈論者聯想論者、超越論者の種々の論難する所にして吾人は是に同問題を離れて寧ろ吾人の本論の主旨たる

個性研究即ち自我の客體的研究にのみ限らんとす。自我の客觀的表現に就ては吾人は Selfishness の問題に到達するものにして此處に本能の研究は其の意義を有するに至る可し。(cf. vol. I. pp. 307-9. pp. 317-329.)

五

ウヰリアム、ジェームスの「心理學原理」の第二卷第二十四章(pp. 383-41)及同卷第二十八章の一部(pp. 678-)は本能の研究に當てられ前者に於て本能の性質及其種類、後者に於て本能の起原に就て述ぶる所有り。本能の起原は是に吾人の必要とせざる所にしてたゞ前者に就きてのみジェームスの研究を窺はんと欲す。勿論本能自體は生理學的現象なれども其の衝動的作用は常に個體の心理學的現象を伴ふものなるが故に心理學上に於て斯かる現象を取扱ふは決して無意義ならざる可し。蓋し感情は生理學的現象の心理

學的名辭にして感情は認識の始原なるが如くに (cf. vol. I. p. 222) 本能はあらゆる行爲の始原たるの觀あり。本能活動は與へられたる刺激に對する個體の反動的運動の而も有利なる先天的關係なり。而してジェームスは Preyer 教授の説に對して第二卷四〇四頁―四四〇頁の間に人類に於て本能の名稱を有する多くの著しき傾向を擧げ人間に於ける本能は其數に於て他の下等動物の其よりも僅少なりとする説に反對して斯かる夥しき本能の集合は如何なる他の哺乳類の中にも全く見出されざるもの也とせり。(vol. II. p. 41) 然も一般に思惟せらるゝが如くに本能に基く行爲は常に盲目不變のものに非ずして記憶の能力を有する動物にあつては本能的行動も其が屢繰り返さるゝに於ては盲目の状態を脱し此處に其の結果を豫期せずして發すてふ特質を失ひ其の結果が個體の認識し得る範圍にあるに於ては斯

かる行爲は結果の豫知に伴はるゝに至る可し。……而して斯かる結果の豫知は望ましき結果たるか或は望まじしからざる結果たるかに應じて必ず純然たる衝動を促進し或は仰止す。……斯くの如くして動物が其の初め如何によく本能運動に於ける能力を有せしとするも此等の衝動に加ふるに記憶聯想推理豫知の能力を相當の程度に有し其の本能が經驗と結合するに於ては彼の行爲は著しく變化せらる (vol. II. p. 390) 『人は如何なる下等動物よりも複雑なる多くの衝動を有せり。而してかゝる衝動其のものは最も低劣なる衝動と等しく共に盲目的運動なれども人が此等の衝動に従ひ其の結果を経験したる彼は其の記憶反省及推理の力によつてかゝる行爲は其の結果の豫知せらるゝと相結んで遂に彼によつて感じ得らるべき行爲となる。(op. cit. vol. II. p. 390)

而して最も興味あるは本能の種類なりとす。蓋し造化の妙は生物に矛盾せる本能を附與し其の經驗に依て得られたる心的能力に依て其の生物の外的適應を全からしめ以て生物の生存を安固ならしめたり。

『自然は相矛盾せる本能を多くの種類の事物の上に働かしむる可く備へ如何なる衝動に依て處するやは個々の場合の状況に於ける些々たる變化によつて決定せらる。斯くて貪慾と猜疑、好奇心と怯懦、羞恥心と欲望、畏羞と誇張、社交性と好闘性等は人に於けると等しく高等なる哺乳類に於て速に相互に交渉し常に變じつゝその平衡を保つが如し彼等は何れも當初は盲目なる生得の衝動にして且確然と決定せる種類の反動運動を生せしむるものなり。然らば之は何れも普通に規定せらるゝ本能なれども彼等は互に相反し唯適應の特殊の機會に於ける經驗に依てそ

の決定を定むるものなり。此等の矛盾せる衝動を有せる動物は「本能的」行爲を失ひ狐疑と撰擇の生活即知的生活を營むの觀あり。然れども彼は全く本能を有せざるが故に非ずして寧ろ彼の有する種々なる本能の夥多は互に其の發動の道を妨ぐるに至るが故也』(Vol. II, pp. 392-393) 即ち人は理性によつて動くとの假定に於ける理知は單に推理の力を意味するのみならず、或種類の本能に従ふの傾向に對する名稱たるべく (Op. cit., p. 380) 『斯くて本能と理知との語辭に就て吾人を煩はすことなく吾人は如何にも人のその外圍に對する反動が下等動物の反動に比して時としては著しく不定なるありと雖も斯かる不定は人の有せざる或種の行爲の原則を此等動物が所有せるに基くものに非ず否寧ろ人は彼等の有するあらゆるの衝動を有し更に多くのより以上を有せり。換言すれば何等本能と理知

との間に實體的反對の存するに非ず理知其のもの如何なる衝動をも抑止する能はず一衝動を無効ならしめ得るは其の反對の衝動にあり。然れども理知は推理を爲すによつてこの反對の衝動を開放し得る想像を誘致するを得。斯くて最も理知に富める動物は最も又本能的衝動に富める動物なるべきも彼は單なる本能的動物の如くに宿命的 automaton に非ざるべし。』(Op. cit., p. 393) 斯くの如く人類にとつてのみの存在と思惟せらるゝ理知並に高等なる心的活動の如きも寧ろ本能の漸進的進化と解せらるゝ可きなり。

(cf. Talks To Teachers on Psychology; And to Students on some of Life's Ideals, 1901, pp. 22-3.)

以下此等の本能中吾人にとつて必要且興味ある部分に就てジェームスの思想を窺ふべし。先づジェームスに依れば競争本能は人類社會の活筋なり吾人が孤獨たるを欲せず常に吾人の隣人に

つて喜ばしき利益に自己の分與し得ざるは好ましからざる所なり。競争本能は自己の劣れるを快しとせざるが故に他のもの爲す所を模倣せんとする本能にして往々我利と貪慾との惡徳を來すが故に非難せらるゝ所なれども『斯かる競争の感情は吾人の存在の其の基底に横はるものにして總ての社會改良は多く此の感情によるあり。惡意あり貪慾なる性質のものあると共に高尚にして且寛大なる性質の競争心又存す。』其の最小の害惡を以て利益の最大を收むるは最も賢明なる法にして『吾人の行爲の最も深き源泉は他のものの行爲を覺認するにあり、他の努力の覺認は吾人自己の努力を誘起し支持する所なり、競走場に於て互に先立つ敵手は彼の後に接する走者をして追ひ抜がんと努力せしむる刺戟を興ふるものなるが斯かる刺戟の力は走者獨りの場合に於てよく自己の意志の中に見出す能はざる

可し跑步せる馬を早むるには彼をして歩調を保たしむべく其の傍に一頭の馬の疾駆するを要す (cf. Talks On Psychology and Life's Ideals. pp. 49-53)

闘争本能は等しく何等價値を有せざる激情として屢々解せらるゝも努力に對する最も力強き拍車たるべし『好闘性は必ずしも肉體的争闘性の形に於てのみ考へられるを要せず一般に艱難の前に挫折するの不快を意味し得るものたるべく其は吾人をして至難なる事業の挑みあるを感せしむるものにして活氣あり企てある性質にとつて缺く可らざるものなり』(op. cit., pp. 54-5) 更にシェームスは所有本能に就て述べたり所有本能は等しく人類の根本的資質にして『獲得性の發端は幼兒の示す衝動即ち彼等の注意を喜ばしめたる事物を握み又は乞ふ本能に於て見らる言語を發するを得るに至るや彼等の強く言ふ最

初の言葉の中に「自己」及び「自己の」の言辭存す彼の最も早き相互の争は所有の如何に關す。：所有本能の以後の發展に就ては吾人は語るを要せざるべし。何人も吾人の見る喜ばしき事物は何物たりとも之を望まざらんことの如何に難く而して如何なる事物の美味も其の他の手中に在る限は吾人にとつて屢怨恨たるかを知る他のものが所有せる場合には其の事物を所有せんとする本能は屢、彼を害せんとする本能に轉せられ嫉妬猜忌と稱する感情を生ずべし』(Principles of Psychology vol. II p. 422)『此の本能の深く且つ原始的なる事實は共產主義的ユートピアの凡ての急激な理想に先づ一の生理學的不信を投するに似たり、人類性質の改變せらるゝに至る迄は私的所有の制度は實際上廢するを得ざらん個人がその絶對所有を確言するを得且恐らく全世界に反抗しても擁護す可き自らの背に着

けたる衣服以上に何ものかを有せざる可らずとするは其の精神的健在にとつて缺く可らざるものなり財産に關して最も嚴肅なる誓約を爲すの宗教の僧派の如きも餘りに無趣味なる條件に縮減することに依て不幸となれる人の精神の爲めに其の規則を幾分寛恕するに至れり、修道僧も彼の書物の所有を必要とす可く尼僧も亦彼の小さな庭園を有し其の室には肖像繪畫等を飾るべし』(Talks to Teachers. pp. 55-56)

吾人は更に本能より習慣への推移及び其の勢力に就て考察せんと欲す。

社會の強制力

(特にデュルケムの學說に就いて)

野村兼太郎

吾人を類の生活が社會組織を中心とすることは改めて論ずる迄もない。個人の生活は社會に於いて且つ社會に依つて始めて成立することが出来る。社會を離れて個人は生存し得ない。こゝに於いて個人對社會の問題が惹起せらるる。若し個人にして全然社會に無意識的に服従し少しの個人性をも發揮しないならば、そこに何等の問題と云ふべき問題も起らないが、其の服従が意識的であるか、若しくは社會と相齟齬するやうな個人意識を有する時には、其の者は明かに社會の強制力を意識する。此の社會の強制力とは何を意味するのか。人類が未だ原始の状態にあつた時の社會の強制力と現代文明人の意識する社會の強制力との間に何等相違する點はないだらうか。人類文化の發展と社會の強制力の變遷とに關して少しく考察を施さんとするのが此の一篇の趣意である。